

地理歴史科（地理 B） 学習指導案

令和〇年〇月〇日（〇）
埼玉県立所沢中央高等学校
教諭 宮本 昌幸

1 単元名：河川と海岸の小地形

2 単元について

（1）教材観（学習単元の概要）

この単元は、気候分野と並び自然環境における一分野、地形に関する単元である。内的営力による大地形については前単元までで終え、外的営力による小地形に入ったところである。小地形のうち河川地形は、小中学校の理科で学習した内容の延長で、理科に興味を持っている生徒にはわかりやすい内容であるが、理科が苦手な苦手意識をもつ生徒にとっては、理解しにくい単元である。地図や地形模型などのビジュアル教材と、教科書本文にある記述とを併せ、現実の地形をイメージしながら理解する必要がある。河川地形については、その分布や特徴、成因について学ぶとともに、災害や土地利用など人間生活とのかかわりについても、生徒たちには学んで欲しいと考えている。また、河川地形において土地利用や人間生活とのかかわりを学ぶことによって、自然地理分野から、農業地理など人文地理分野への橋渡しとしての、教科内位置づけがなされる。

（2）生徒観（学習状況の実態）

授業には真面目に取り組む生徒がほとんどである。日ごろから教師の話をよく聞いていて、のプリントへの取り組みも良好である。考査における得点も、平均的には高い。しかし考査直前の、文字だけでの丸暗記をしている生徒も、一部含まれているように感じている。本質的な理解のために、生徒たちには、教科書本文にある文字としてだけではなく、地図等の図による理解も併せて進めて欲しい。

（3）指導観（学習の手立て）

教科書をしっかり読ませるために、空欄補充式のプリントを用いる。また、小テストの実施を含めた、こまめな復習が必要だが、その際、身近な例を用いて理解させることが有効である。埼玉県西部地区の例として、富士見市の荒川について扱うが、ここでは、明治期の迅速測図や資料を用いることになって、河川改修前の情報を知ることができる。水害の歴史や三日月湖の形成についても、古地図や歴史的資料を用いることで、その形成過程や変遷が理解できる。

3 単元の目標及び評価規準

（1）単元の目標

小地形の分布や特徴・成因について考察するとともに、災害や土地利用など人間生活とのかかわりを考察する。

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
災害や土地利用など人間生活とのかかわりについて意欲的に追求し、とらえようとしている。	小地形について、その分布や特徴を成因と関連付けて考察するとともに、人間生活とのかかわりを多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現できる。	古地図や地形図、古文書などの資料から、有用な情報を適切に選択し、その地域の地形の特徴と成因を読み取ることができる。	小地形について、分布や特徴、成因や人間生活とのかかわりについて理解し、その知識を身につけている。

4 指導計画

時	指導内容等
1	河川と海岸の小地形(小地形の形成と河川地形)
2 (本時)	荒川流域の地形
3	河川と海岸の小地形(海岸にみられる小地形)
4	復習(小テストを含む)

5 本時の学習

(1) ねらい

前時で学習した河川地形について、身近な例である荒川流域の例で復習し、理解を促進する。
特に、三日月湖の形成について、古地図や古文書を利用して、実例として理解する。

(2) 展開

時間	生徒の活動	教師の指導・支援等	資料等
0～10分	河川上流・中流に特徴的な地形を復習する。 V字谷 河岸段丘	- 前時で取り組ませたプリントを返却する。 - 埼玉県立川の博物館「荒川大模型 173」の写真を見せる。	プリント xx-1 枚目 スライド投影、または 拡大写真
10～20分	現在の地形図をみて、びん沼川がどのような地形なのか確認する。	- 地図中の「びん沼川」という文字に印をつけさせる。 「びん沼川」を青色で塗りつぶさせる(実際の配付プリントは白黒印刷)。 - プリント xx-1 枚目を活用し、びん沼川がどのような地形なのか確認させる。	プリント xx 枚目の「地形図」
20～35分	- 東大久保地区の水害と河川改修の歴史を知る。 - 住民から県へ請願していたことを知る。	- 生徒を指名し、プリントに記入したことを読ませる。 - 請願書は読むことが難しいと思われる。南畑村沿革史にあることの確認程度で良い。	「埼玉県入間郡南畑村之沿革史」 「請願書」

35～45 分	・荒川の旧流路の位置を知る ・びん沼川がどのように形成されたのか考察する。	・地図中の「荒川」という文字に印をつけさせる。 ・三日月湖の形成はプリントxx-1 枚目をヒントに、書かせる。	「迅速測図」
45～50 分	・流域の人々の思いを、びん沼川の形成からまとめる。 ・洪水だけでなく河川改修によっても三日月湖が形成されることを確認する。	・(時間次第だが)生徒を指名し、プリントに記入したことを読ませる。	

6 板書例と使用資料

板書は行わない

プリント記入により授業を進める (プリントは別紙)

スライド投影または拡大写真-1 (V字谷)



スライド投影または拡大写真-2 (河岸段丘)



スライド投影または拡大写真-3 (河岸段丘)

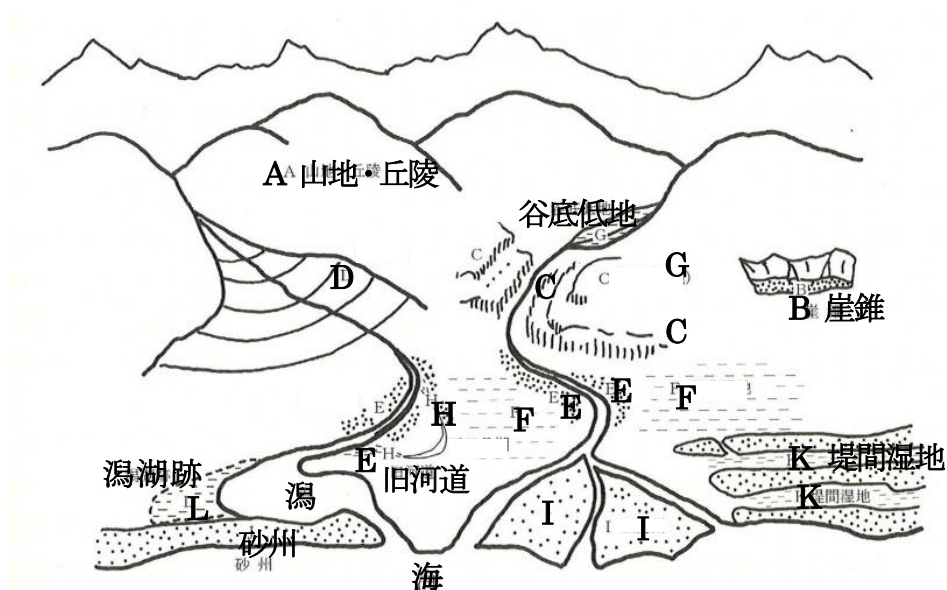


スライド投影または拡大写真-4（河岸段丘）



1 年 組 番 氏名:

下の地形模式図中のローマ字を答える



C D E

F H I

下の空欄を埋める

太陽エネルギーは(1)の源である。この力は狭い範囲に作用するため、小規模な谷や(2)などができ、これらは(3)とよばれる。山地を流れる河川は侵食・運搬力が大きく、山地は河川によって、深く刻まれ(4)が形成される。谷の出口では、礫や砂が扇形に堆積し、(5)が形成される。

蛇行した河川が洪水を契機に流路が変わると、(6)(河跡湖)ができる。河道近くには、洪水時に水と一緒にあふれ出た砂が堆積し、(7)とよばれる微高地を形成する。この背後は、水はけの悪い(8)となる。河口に近づくと、河川は運搬力を失い、砂や泥が堆積して(9)(デルタ)を形成する。

1 年 組 番 氏名:

・現在の地形図をみて、下の作業を行う



- 1.びん沼川という文字に印をつける
- 2.びん沼川を青色でぬる
- 3.びん沼川は何という地形か?プリント xx-1 枚目で学んだ用語から書く()

・東大久保地区の河川の歴史について資料中の語を用いて空欄を埋める。

堤防及水害

荒川、入間川の堤防は長祿年間、上杉氏(扇谷)が家臣たる太田道灌をして、川越に築城と共に
備上から糧食の安定の道を講ずるため、領内に文明年間に堤防を築きて河川の氾濫防備に始まりし
伝えてゐる。以来城主は出水毎に若干の止置き改修をなし、除々に拡大し明和頃より大なる所は敷
十間、高二間馬踏七八尺に及びしが徳川幕府の勢力衰退し明治初期迄、其の俣となり、後明治三十
項より治水の土木事業盛になつて益々拡大し現在の如き大堤防を見るに至つた。

水害は古来より河川の沿岸として県下で有名な被害地にして元は難波田と村名を書きて称せしを水
頻々たる故を以て、南畑なんばたと改名せる程なれば其の被害大なりしが察知されてくる。当時の水害に関
する記事は著者の知るを能はずして、僅かのみ知れる處を記す。

東大久保地区を含む旧南畑村

(現富士見市の一部)は、古来より
() の被災地として有名だ
った。そのため大きな ()
を築くなどの、() が行わ
れてきた。

矢沢熊次郎(1956):

『埼玉県入間郡南畑村之沿革史』。

南畑村教育委員会。より

(注)

1889(明治 22)年 上南畑村,下南畑村,

南畑新田,東大久保村→入間郡南畑村

1956(昭和 31)年 南畑村,鶴瀬村,水谷村
→富士見村

1964(昭和 39)年 富士見村→富士見町

1972(昭和 47)年 富士見町→富士見市

諸聘書

東大久保地区を含む
旧南畑村（現富士見
市の一部）は、
堤が（ ）の
箇所多い。

入河郡常々係村外指入ナ村ニ更々市街
以郡常々係村上南細村兩村ハ牛馬虛弱
箇所爲改修ト通ル河千四斗中ニ御着
ある目今所之事ニ自之河川幅狭塞
箇所松廣クナシ且之郡年村新田地内
付河ハ盤尾ニある日川縁ニ砥石箇所大
築ミある新果村ニ水害ヲ醸生スルニ可
見陸及々人民ハ長江端ニ申有

1883(明治16)年頃の村から埼玉県への「請願書」

地理 B(宮本担当 20xx 年度)プリント xx 枚目(裏-2)

・1881 年の迅速測図 (1:20,000)での荒川の流路について、現在の流路と比較する。



荒川築堤後は明暦年間、小ヶ谷（川越）の破堤に依り本村に洪水押寄せ、当時新河岸川除堤皆無かりしゆゑ、極めて窪地のみの被害にして割合に損害少かりしが宗岡村にて佃堤より、下ノ谷に掛て官文の項より築堤せるため、本村に在りても竹ノ内木染続きの川越往還に置土、数回に及び、遂に土手形を呈せるため新河岸川の氾濫は防ぎ得るも一度荒川堤防決潰の際は下流ノめぐり濁水堤内に溢れ農作物の収獲皆無の情態に立至りたる故、亦々荒川堤の拡大に努め被堤の数を減じ、村民稍々安堵せしが、後天明六年の洪水には東大久保二ヶ所決潰し、其の間凡百間許り残した。依て欠間と称し小名となつて現に押堀二ヶ所が残る。それより数回の出水在りしも大なる損害なかりしが弘化三年の大洪水には之れ等堤防も瞬間に決潰され、忽ちに耕地は湖水と変じ減水後検すれば蛭沼堤数百間の破壊を来し土砂は良田に滞積して砂塚数ヶ所を作る。之れ古老の謂ふ丙午の洪水である。又嘉永、文久等にも上流より押流れ、明治元年は非常の降雨続きに増水甚だ敷く激流は忽ち砂原・志戸・八ツ島・中丸等四ヶ所の決潰を見る。ために今尙三ヶ所に池を残し、中丸にては当麻伊太郎方家屋流失せり、同時に鶴新田には堤内に溢れたる水の排出に際し、意外に深き池を生ず。池の深き実に二十尺に及べりと云う。翌々三年にも出水し志戸垓際を破堤し、故に農作物は減収し村民の困難は実に甚しかつた。其の後は水防に長じたる故、当地の破堤は殆ど無く、十一年池ノ辺（旧大東・川越市）、二十三年古谷本郷、大正二年には寺山等皆上流よりの罹災なりしと、明治四十三年八月には洪水の中の最大の洪水と云

ふべきにて、関東一円河川と名の付く所は総て満水し、荒川の如きは左岸右岸の区別なく濁流は堤の内外に漲り本村にては蛭沼を始め、登戸・八ツ島・中丸等数ヶ所の破堤は一層堤内増水を速かならしめ家財道具は勿論家屋と共に流るゝ者、或は溺死せる者、家畜類の屍は到る所に浮び或は流れ実に惨状目もあてられぬ大被害の状況であつた。

矢沢熊次郎(1956): 『埼玉県入間郡南畑村之沿革史』. 南畑村教育委員会.

皇三郎牛堤

皇三郎牛堤新田三重國堤

入田郎牛堤

入田郎牛堤大石堤

本村新田

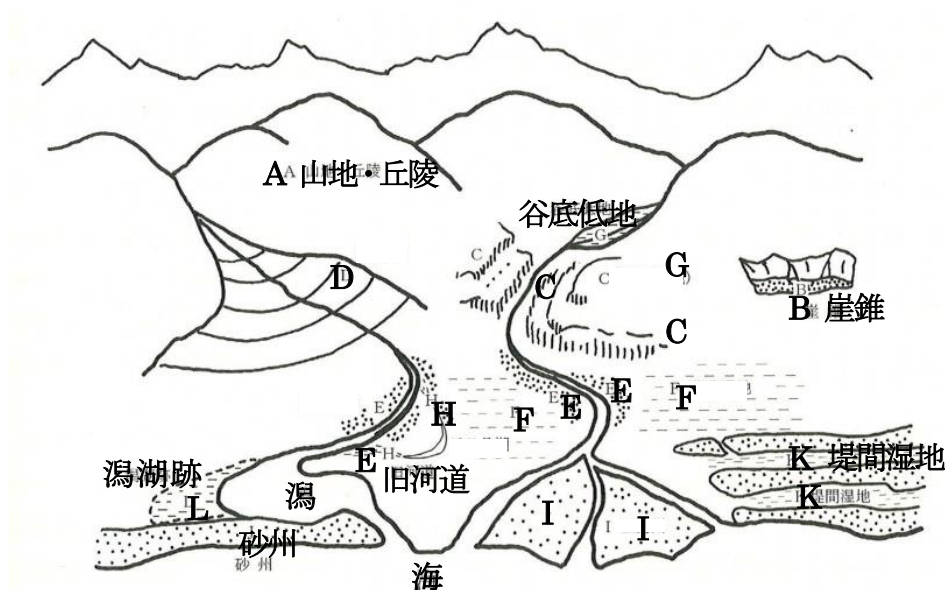
- 堤防：三重國堤及津路公堤
- 堤防：堤防
- 堤防：津路公堤及砂堤
- 堤防：三重國堤及津路
- 堤防：堤防

北
東
西
南

上田新田

1 年 組 番 氏名: 解答例

下の地形模式図中のローマ字を答える



C 河岸段丘 D 扇状地 E 自然堤防

F 後背湿地 H 三日月湖(河跡湖) I 三角州(デルタ)

下の空欄を埋める

太陽エネルギーは(1 外的営力)の源である。この力は狭い範囲に作用するため、小規模な谷や(2 沖積平野)などができ、これらは(3 小地形)とよばれる。山地を流れる河川は侵食・運搬力が大きく、山地は河川によって、深く刻まれ(4 V字谷)が形成される。谷の出口では、礫や砂が扇形に堆積し、(5 扇状地)が形成される。

蛇行した河川が洪水を契機に流路が変わると、(6 三日月湖)(河跡湖)ができる。河道近くには、洪水時に水と一緒にあふれ出た砂が堆積し、(7 自然堤防)とよばれる微高地を形成する。この背後は、水はけの悪い(8 後背湿地)となる。河口に近づくと、河川は運搬力を失い、砂や泥が堆積して(9 三角州)(デルタ)を形成する。

1 年 組 番 氏名: 解答例

・現在の地形図をみて、下の作業を行う



- 1.びん沼川という文字に印をつける
- 2.びん沼川を青色でぬる
- 3.びん沼川は何という地形か?プリント xx-1 枚目で学んだ用語から書く(三日月湖)

・東大久保地区の河川の歴史について資料中の語を用いて空欄を埋める。

堤防及水害

荒川、入間川の堤防は長祿年間、上杉氏(扇谷)が家臣たる太田道灌をして、川越に築城と共に
備上から糧食の安定の道を講ずるため、領内に文明年間に堤防を築きて河川の氾濫防備に始まりし
伝えてゐる。以来城主は出水毎に若干の止置き改修をなし、除々に拡大し明和項より大なる所は敷
十間、高二間馬踏七八尺に及びしが徳川幕府の勢力衰退し明治初期迄、其の俣となり、後明治三十
項より治水の土木事業盛になつて益々拡大し現在の如き大堤防を見るに至つた。

水害は古来より河川の沿岸とて県下で有名な被害地にして元は難波田と村名を書きて称せしを水害
頻々たる故を以て、南畑なんばたと改名せる程なれば其の被害大なりしが察知されてくる。当時の水害に関す
る記事は著者の知るを能はずして、僅かのみ知れる処を記す。

東大久保地区を含む旧南畑村

(現富士見市の一部)は、古来より

(水害)の被災地として有名だ

った。そのため大きな(堤防)

を築くなどの、(治水の土木事業)が行わ
れてきた。

矢沢熊次郎(1956):

『埼玉県入間郡南畑村之沿革史』.

南畑村教育委員会. より

(注)

1889(明治 22)年 上南畑村,下南畑村,

南畑新田,東大久保村→入間郡南畑村

1956(昭和 31)年 南畑村,鶴瀬村.水谷村
→富士見村

1964(昭和 39)年 富士見村→富士見町

1972(昭和 47)年 富士見町→富士見市

・東大久保地区の河川の歴史について資料中の語を用いて空欄を埋める。(つづき)

請願書

東大久保地区を含む
旧南畑村(現富士見
市の一部)は、
堤が(虚弱)の
箇所多い。

入河部常々係村外指入村々更々市仕
リ部常々係村上南畑村両村々堤虚弱、
箇所爲改修下通ル河部千曲中より御着
あま目今河之事、自ら河幅狭塞、
箇所松廣ク、今に至り都牟村新田地内
付洲に盤居三、あま日川縁に上研、以箇方七尺
築き、あま新井村々水害ヲ醸生スルニ可至、
見陸及々人民々々長久保へ申出有、

地理 B(宮本担当 20xx 年度)プリント xx 枚目(裏-2)

・1881 年の迅速測図 (1:20,000)での荒川の流路について、現在の流路と比較する。



1881 年の荒川の流路は、現在の荒川より西方にある。現在はより直線的な流路であるが、1881 年は蛇行した流路を示している。また当時の荒川の流路は、現在のびん沼川とほぼ一致する。つまり、荒川はこの区間で河川改による直線化が行われ、残った旧流路は三日月湖として残された。